

《イタリア文学史》とベネデット・クローチェ

國司 航佑

はじめにかえて

あんたのよいところは、分かっていないことをごまかさないことなんですよ……。これは、今から10年以上前、私がイタリア文学の研究を始めた頃に天野先生にいただいた数少ないお褒めの言葉の一つである。だがこれは、実のところ叱責の言葉でもあった。修士論文を読んでいた際、先生はそこに「分かっていないことをごまかした」形跡を見つけられたのである。上の文句は、こうした文脈で発されたものであった。私としては、ごまかしていたつもりはなかった。が、その分、物事を理解するということがどういう行為なのか、改めて考える機会になった。それ以降私は、自らの文学研究の目的として、「物事をしっかりと理解すること」を意識するようになった。

ところで天野先生は、私の研究対象であるクローチェという思想家を好きではない。だから、私の研究に大きな関心を示すことはあまりなかった。だが数年前、《文学史》という概念／方法論に関する研究計画について相談した際、驚くほど興味をもっていただいた記憶がある。そこで、本論集には「《イタリア文学史》とベネデット・クローチェ」という題目で寄稿することに決めた。「しっかりとした理解」を土台に何か興味深い発見を提示できればよいが、果たして……。

第1章 クローチェとデ・サンクティス——《イタリア文学史》を巡って

20世紀のイタリアを代表する思想家ベネデット・クローチェ（1866-1952）は、多作な文学研究者でもあった。クローチェ本人によれば、彼の文学理論の完成形は1936年に出版された大作『詩について』（*La poesia*, 1936）に見られる（PE: 30）のだが、注目すべきことに、この作品は詩人カルドゥッチと文学史家デ・サンクティスに献呈されている。この献呈に関連して、クローチェは『詩について』の「序文 *avvertenza*」において以下のように述べる。

フランチェスコ・デ・サンクティスとジョズエ・カルドゥッチ——二人の師は、異なる道を通り、異なる方法を用いながらも、詩というものの本質に関してより混じりけのない厳粛な意識をイタリア人のうちに形成することに競って貢献した。彼らの著作に学んだ教えは、本書を著すにあたって常に私の心の中にあった。だから、彼らの思い出に本書を献呈しようという考えに至ったのは自然の流れであった。（P: VII）

クローチェが『詩について』を献呈すべき相手としてカルドゥッチを選んだのは、別稿で論じた（國司 2016: 39-42）ように、自らの詩論における理想的な詩人像を彼に見出していたからである。他方のデ・サンクティス（De Sanctis）の名は、どのような意味でここに挙げられているのであろうか。

フランチェスコ・デ・サンクティス（1817-1883）は、リソルジメント期に活躍した学者・教育者であり、同時に、誕生して間もないイタリア王国の政治にとりわけ教育に関して携わった政治家でもあった¹。彼は、ダンテ、ペトラルカ、レオパルディ等に関して優れた論考を残し、19世紀最大のイタリア文学研究者の一人に数えられるまでになったが、中でも、彼の代表作『イタリア文学史』（*La storia della letteratura italiana*, 1870-71）は、史上最も成功したイタリア文学史とみなされる記念碑的な作品である²。デ・サンクティスはそこで、シチリア派から彼の同時代に至るまでのイタリア文学の展開を一つの流れに沿った「*storia* 物語／歴史」として描いた。その点で、この『イタリア文学史』は、文学史の執筆が王道であった19世紀的な文学研究を象徴する作品となっている。

ところで、『イタリア文学史』の作者を師と仰いだクローチェもまた、同様にイタリア文学史を書いたのだろうか。イタリア文学史の成立と発展の研究に取り組んだ Getto は、この問題について次のように述べている。

クローチェは、意図的にイタリア文学史を書くことは決してなかった。しかし、我々の文学の発展に関する全般的な理解に「到達するために」彼が果たした貢献は、極めて重要なものであった。ひとまず述べておくべきは、イタリアの詩人・作家を対象にして書かれた彼の極めて膨大な数の評論は、我々の文学史のほぼ全体をカバーする像を描き出している、ということである。（Getto 2010: 259）（〔 〕内の付記は論者、以下同様）

Getto がここで指摘しているのは、①クローチェがイタリア文学史を書かなかったこと、そして②それにも拘らず彼のイタリア文学史全般の研究に果たした貢献が極めて大きかったこと、の2点である。

まず、クローチェがイタリア文学史を書かなかったという Getto の指摘①について、その理由は文学理論および文学史の研究者として名高い Wellek の説明を援用するとよく理解される。すなわち Wellek によれば、クローチェは、「文学史を一つの発展的プロセスとしてとらえる見方を論難」（Wellek 1981: 12-13）し、「自ら文学史の社会的な捉え方と呼んだところのものを手厳しく批判した」（Wellek 1981: 13）ため、文学史を書くことを敢えてしなかった、というのである。さらに Wellek は、こうした発想に基づき、クローチェとデ・サンクティスの方法論の違いの一つを、文学史の

¹ デ・サンクティスの生涯および作品については、Muscetta 1990 を参照されたい。

² Wellek 2006 参照。

捉え方のうちに見出す³。

クローチェに見られるあらゆる文学史に対する全面的な否定を、デ・サンクティスは決して理解できなかったはずである。クローチェによれば、執筆が可能なのは批評的な個別研究のみであった。(Wellek 2006: XVIII-XIX)

デ・サンクティスがイタリア文学史の完成者であったのに対して、クローチェはその方法論を全面的に否定している、というのである。このドラスティックな結論は、果たしてそのまま受け入れうるものなのだろうか。

この点に関して我々が考慮に入れなければならないのは、Getto の2点目の指摘、すなわちクローチェがイタリア文学の全般に関する研究を行っていたという事実である。それに関連して、クローチェの死後に Sansone によって編纂されたクローチェのイタリア文学に関する文芸評論集 *La letteratura italiana. Per saggi storicamente disposti* (『イタリア文学——歴史的に配置した諸評論を通して』) の存在は興味深い。4巻立てのこの大著は、第1巻 (Sansone 1965a) が13世紀から16世紀を、第2巻 (Sansone 1965b) が17世紀と18世紀を、第3巻 (Sansone 1963a) が19世紀を、そして第4巻 (Sansone 1963b) が現代文学を、それぞれ扱っている。ここには、クローチェの文学研究におけるイタリア文学史の全体像への志向が見て取れる。

以上踏まえると、《文学史》という概念／方法論に対してクローチェが見せた態度には、少なくともイタリア文学史に関する限り、すっきりと割り切れない微妙なところが残ると言える。すなわちクローチェには、《文学史》の可能性を否定する理論家としての態度と、イタリア文学史の全体像を描こうとする批評家としての態度とが、併存しているように見受けられるのである。そこで本稿では、文学理論家および文芸批評家としての二つの側面からクローチェのキャリアを辿りつつ、その時々には彼が《文学史》に対して実際にどのような態度を示していたかを検証したい。

第2章 19世紀の《文学史》

クローチェ当人が文学史をどう捉えていたかを検証する前に、文学史の定義を整理しておくべきだろう⁴。そこでまず、Getto が自著『文学史の歴史』を執筆する上で掲げた文学史の定義を参照したい。

「文学史」とはつまり、個々の作家あるいは一定の文学的文明の個々の瞬間ではなく、そうした文明の展開全体に検討を加えようとする研究のことである。(Getto 2010: 5)

³ Wellek がクローチェとデ・サンクティスの間に見るもう一つの差異は、文学のリアリズムに関する態度の違いである。(Wellek 2006: XXI)

⁴ デ・サンクティス『イタリア文学史』の Rizzoli 版に Wellek が序文 (Wellek 2006) を書いており、デ・サンクティス以前の文学史の歴史について詳細な解説がある。

Getto はすなわち、文学作品によって示される文化・文明の展開の「全体」を文学史と呼んでいる。Getto のこの定義は、普段我々が文学史という単語を用いて指し示す内容に近いものだと言えるだろう。

こうした意味での文学史が文学研究の最も重要な位置を占めるようになったのは、19 世紀のことである⁵。その背景にあったのは、啓蒙思想の進歩史観あるいはヘーゲルの歴史哲学の登場であろう。歴史が一つの発展的展開を示すものであるという意識は、文学史執筆の一つの前提条件として働いたはずである。19 世紀前半に執筆された文学史の中には、フリードリヒ・シュレーゲルの『古代および近代の文学の歴史』（1815、*Geschichte der alten und neuen Literatur*）のように世界文学的な視点から書かれたものもあるが⁶、際立つのはゲルビーヌスの『ドイツ人の詩的国民文学の歴史』（1835-1842、*Geschichte der poetischen National-Literatur der Deutschen*）やジューディチの『イタリアにおける文学作品の歴史』（1844、*Storia delle belle lettere in Italia*）といった、各国文学史の存在である。ナポレオン戦争以降の国民国家意識の高まりが、こうした各国文学史執筆の契機になったと考えてよい。

実証主義が発展した 19 世紀後半には、自然科学的なアプローチによる歴史叙述が盛んになる。原因と結果の対応を基準に様々な事象が説明される実証主義にあっては、文学作品もまたそれを取り巻く環境によって説明されるものだと考えられた。そして文学史は、社会政治史の一環として執筆されるようになる。その代表的な例は、テヌスの『英国文学史』（1864、*Histoire de la littérature anglaise*）である。その後、19 世紀末まで文学史は文学研究の中心的位置を占め続け、イタリアでは本稿で問題となるデ・サンクティスの『イタリア文学史』が、フランスではランソンの『フランス文学史』（*Histoire de la littérature française*）⁷が、それぞれ 1870-71 年および 1894 年に刊行され、大きな反響を呼んだ。

以上、19 世紀に執筆された文学史の外観を見た。その内容や性質は多種多様であるが、文学の歴史を一つの流れに沿って論じる試みである、という点において共通項が見出せるだろう。19 世紀末に学者としての活動を開始したクローチェは、そうした文学研究のあり方について、どのような態度を示していたのだろうか。以下の各章

⁵ 例えば Jauss は、「その〔文学史の〕最も優れた業績は、おしなべて 19 世紀に属するものである。各国文学史の執筆は、ゲルビーヌスやシュレーラー、あるいはデ・サンクティスやランソンの時代において、文学研究者たちの究極のライフワークとみなされていたのだ」（Jauss 1970: 144）と述べている。ただし、トーマス・ウォートンの『英詩の歴史』（1774-1781、*The History of English Poetry*）や、ジローラモ・ティラボスキの『イタリア文学史』（1772-1794、*Storia della letteratura italiana*）等、18 世紀末に執筆された文学史も存在する。また Compagnon によれば、フランスの場合、「文学史は 1875 年から 1914 年の間に生まれた」（Compagnon 1983: 22）ものであり、19 世紀というよりは世紀転換期に属する事象であるというべきかもしれない。

⁶ 他にも、例えばデ・サンクティスが影響を受けたとされるカール・ローゼンクランツの『詩の総合史教本』（1832-1833、*Handbuch einer Allgemeinen Geschichte der Poesie*）。芸術史というカテゴリーに拡大すると、ヘーゲルの『美学講義』（1835、*Vorlesungen über die Ästhetik*）も挙げられる。

⁷ ランソンの『フランス文学史』が生まれた背景については、Compagnon 1983 に詳しい。Compagnon は、大学をはじめとする各種教育機関における人文科学の位置づけの変容が「フランス文学史」誕生の一つの契機になったと見ている。

では、時系列に沿ってクローチェの文芸批評や美学理論書に検討を加えつつ、彼の文学史観がどのように変化しているか（あるいは変化していないのか）という点を考えてみたい。

第3章 『文芸批評』と「美学基礎」論文における《文学史》

19世紀末、学者としてのキャリアを開始して間もないクローチェは、歴史や文学に関する考証学的な研究を中心的な課題としていた⁸。だが、1894年に発表した『文芸批評』（*Critica letteraria*）という論説文において、クローチェは文芸批評に関する理論的な考察を提示している。そしてその中に、《文学史》に関する論述が見られる。

また、様々な歴史の種類の中で文学史が最も不確定なものである場合が多い、ということもない。なぜなら、文学作品は、それを生み出した社会の感情や思想に容易く還元されるからである。むしろ、そうした感情や思想の起源を説明する、あるいは人間の行為の秘められた究極の動機を説明する際に、より大きな困難に遭遇するのだ。いずれにせよ […] 我々はひとまず、文学の歴史が可能であるかという問題は、その他あらゆる歴史と同じように、議論するまでもない [可能である]と、主張しておくことが肝要である。（PS: 110）（下線は論者、以下同様）

驚くべきことに、クローチェは文学史の執筆可能性を明らかに肯定している。しかも、文学作品が社会思想史の一環であると言明さえしている。この言説は、一方ではデ・サンクティスの文学観と親和性が高く、他方では Wellek や Getto が指摘するクローチェ特有の文学史観とは乖離するものだと言えよう。

続く箇所では、文学の「発展 *progresso*」について言及がある。

そして、もし私がそうした芸術の形式に先立つあるいは連れ添う歴史的条件を考慮に入れるならば、次のことを見極めることができよう。それはすなわち、それぞれの作品が他の作品に対していかなる長所と短所とを有しているか、またそれらの作品において、個々の作者がいかなる長所と短所とを有しているか、という点である。この場合、例えば、17世紀文学——17世紀文学は「表現の」効果を追い求めたことにより文学形式に頹廃をもたらしたと言えるが——に対して、アルカディアの詩は発展として立ち現れるだろう。そしてロマン主義的な戯曲は、似非アリストテレス的な偏見や狹隘に対する発展として立ち現れるであろう。（PS: 112）

クローチェは、芸術作品を歴史的コンテクストにあてはめて評価する必要性を述べてお

⁸ 「芸術」と「歴史」の関係については、1893年に発表された論考「芸術の包括的概念のもとに帰せられる歴史」（*La storia ridotta sotto il concetto generale dell'arte*）において既に言及されているが、そこには芸術・文学の歴史を論じる箇所はないため本稿では取り上げない。この論考の詳細については國司 2016（27-28）を参照されたい。

り、そうした作業を経たとき、ある時代の文学潮流が他のある時代の文学潮流に対して一つの発展形を示しうる、と論じている。この論述を見る限り、1894年の時点では限定的であれ文学史の発展的な解釈を是としていたと考えてよいだろう。

さて、『文芸批評』の刊行から6年を経た1900年、ボンタニアーナ学会にて、クローチェは「表現の学および一般言語学としての美学基礎研究」(*Tesi fondamentali di un'Estetica come scienza dell'espressione e linguistica generale*)と題された論考(以下「美学基礎」論文と略記)を発表する。これは「芸術の自律 *autonomia dell'arte*」などのクローチェ美学を代表する画期的な理論が初めて登場する作品としてよく知られている。

ここで一旦、「美学基礎」論文におけるクローチェの議論を確認しておこう。クローチェは、人間精神の全ての活動を、まず「認識活動 *attività conoscitiva*」と「実践活動 *attività pratica*」に区分し、次にその前者を「直観的認識 *conoscenza intuitiva*」と「理論的認識 *conoscenza teorica*」とに、その後者を「経済活動 *attività economica*」と「倫理活動 *attività morale*」とに、それぞれ二分している。クローチェは、こうして得られる精神の四区分の図式を基にしつつ、「芸術」が「直観的認識」に他ならないことを論じた上で、それ故「芸術」が人間精神以外の現象(=自然現象)や精神のその他三つの活動と、厳密に区別されるべきであることを主張する。クローチェは、こうした芸術の特性を「芸術の自律」と呼んだ。

「美学基礎」論文は、クローチェが「芸術」を中心的に考察した初めての作品でもある。クローチェが「芸術」という単語を用いる際、そこではジャンルの区別を重視せず一つの統一的概念として「芸術」を捉えようとする意識が働いている。だが、具体例として言及するのは、多くの場合、文学者・文学作品である。それは「美学基礎」論文においても同様であり、そのため「芸術」の歴史に関する議論の中でも、例に挙げられるのは文学史である。

人類が生み出す芸術作品をただ一つの発展的直線上に位置づけることは、まったくもって恣意的な所作である。このような作法は、例えば規範に重きを置く学説において要求されたものである。彼らによれば、人類は、一定の規範に接近することにより発展し、そこから遠ざかることにより部分的に後退する、ということになるのであった。美を追求する作品の歴史は、確かに複数の発展的循環を示す。だが、その発展的循環の各々は独自の問題を有するのであって、その問題に対してのみ発展的と呼べるのである。シェイクスピアはダンテに比べ一歩先に進んだとは言えず、またシェイクスピアに対するゲーテも同様である。そうではなくて、ダンテは幻想を描く中世人に比して、シェイクスピアはエリザベス朝時代の劇作家に比して、ゲーテは疾風怒濤の作家に比して、それぞれ前進したのである。(PS: 112)

クローチェは、一方では初めから終わりまで「一直線 *una sola linea*」上に発展する文学史を否定しつつ、他方ではその時代ごとテーマごとの「複数の循環 *cicli*」を辿る発展的展開を肯定している。『文芸批評』の頃に比べると、一方向的な発展的文学史

を明確に否定している点でクローチェの態度に変化が見られるが、時代の中に文学作品を位置づけその間に発展的展開を見ているという点においてはまだ文学史の可能性を肯定的に捉えていると言えるだろう。

1902年に発表されたクローチェの代表作『表現の学および一般言語学としての美学』（*Estetica come scienza dell'espressione e linguistica generale*、以下『美学』と略記）は、「美学基礎」論文の内容を中心とした「理論の部」と美学という学問の歴史を辿る「歴史の部」とからなる。『美学』における文学史に関する議論は、「美学基礎」論文におけるそれを拡張したものであるが、とりわけ二つの点が新たに論じられている。すなわち『美学』においては、第一に「芸術・文学の歴史 *storia artistica e letteraria*」の比較対象として一直線上に発展すべき「学問の歴史 *storia della scienza*」が挙げられており（ESE: 156）⁹、第二に、「発展」という単語に「後退」という単語が並置されている（ESE: 157）のである。だが、全体の流れとしては「美学基礎」論文と『美学』の間に大きな差異は認められない。

第4章 「19世紀後半のイタリア文学に関する覚書」における〈文学史〉

1903年、クローチェは評論誌『クリティカ』（*«La Critica»*）を創刊し、文芸批評の活動を本格的に開始する。クローチェは、『クリティカ』誌の創刊から1914年に至るまで、「19世紀後半のイタリア文学に関する覚書」（*Note sulla letteratura italiana nella seconda metà del secolo XIX*、以下 *Note* と略記）という題のもと、同時代のイタリア文学に関する連載を行っている。創刊号に掲載された「創刊の辞」（*Introduzione*）には、その連載の目的を示す以下のような文言が記載されている。

それ〔本誌〕が毎号掲載する予定の記事、覚書、論考、資料は、次のような唯一の目的に向けて整理され、またそこに収斂されるものとなるだろう。その目的とはすなわち、ここ半世紀間にイタリアで発表された文学作品および学術書について、初めてその歴史的図式を、判断材料を用意しつつ試作することである。（CR03: 4）

クローチェは、『クリティカ』誌の論評の対象が「ここ半世紀」（19世紀後半）の「文学作品」および「学術書」であることを宣言しているが、彼が実際に担当したのは「文学作品」に関する評論であり、「学術書」については盟友ジョヴァンニ・ジェンティーレに任せている。本稿の視点からとりわけ注目すべきは、クローチェが『クリティカ』誌刊行の目的として、「歴史的図式 *schema della storia*」の提示を挙げていることである。これを「美学基礎」論文（および『美学』）における〈文学史〉に関する発言と照応させると、「創刊の辞」に示された連載の目的がこの時期のクローチェの美学理

⁹『美学』については重大な差異のあるヴァリエントが存在している（國司 2016: 87-89）が、本稿の引用に際しては国家版を参照しつつ初版（1902年版）を再現している。

論に適合していることが分かる。

1903年の『クリティカ』誌創刊号には、「創刊の辞」に続けて、*Note*の初回が掲載されている。連載の初回は、詩人ジョズエ・カルドゥッチ（1835-1907）の論評にあってられた。そしてそのカルドゥッチ論には、当時のクローチェの文学史観が表れているのである。第1章には、19世紀の前半からカルドゥッチの登場に至るまでのイタリア文学の推移に関する見解が述べられている。以下に掲げるのは、その末尾である。

さて、上のような診断結果となった時代から今日にいたるまで、多くの努力がなされ、また多くの精神が探求を行った。到達された目標、見出された事柄は少なくない。全体的にみるならば、我々の文学のうち、最近のものがその直前のものより遙かに実直でかつ実態を伴ったものだということは否定できないだろう。そして、その最近の文学の批評を始めるに当たって、我々は、現代イタリア文学の中で最も著名でかつ最も象徴的な人物、[活躍した]時期においても重要性においても先頭に位置する人物、すなわちジョズエ・カルドゥッチの作品から始めないわけにはいかない。最近出版され、幅広く熱狂的に受け入れられた彼の全集が我々に促すのは、（詳細な批評や脱線をわきに追いやりつつ）イタリア文学全体の歴史におけるカルドゥッチ作品の位置を定めることである。（CR03: 12）（傍点は論者、以下同様）

ここには、まず、19世紀中葉のイタリア文学に関する歴史的な論述が見られる。文学を歴史の流れに沿って論じようとする当時のクローチェの文学史観が実践されているのである。また、＜19世紀中葉のイタリア文学の流れとその中に位置づけられる詩人カルドゥッチ＞という構図が見られるが、これは「美学基礎」論文において挙げられた具体例（中世詩人とダンテ、等）と同様の構図である。

第5章 *Note*から『美学入門』へ

19世紀後半のイタリア文学に関する連載*Note*は1914年まで続くが、その間にクローチェの文学史観は大きく変容している。それを示すのが、連載の最終回を飾る「結びの言葉」（*Licenza*）である。

詩・芸術の歴史もまた、概して自らのドラマ、自らの弁証法的発展 *dialettica* を有している。そうでなければ、そもそも歴史とは呼ばれないだろう。しかしながら、それは作者一人一人の、もしくは芸術的創造に関わる努力一つ一つの弁証法的発展・ドラマである。作者は常に、精気を欠くモチーフや扱いにくい題材に取り組みつつ、時には勝利し、またある時には屈服し敗北する。そしてそこには、芸術家の葛藤、勝利、失敗、完成、凋落が生まれるのである。（CR14: 83）

クローチェはここで、弁証法的な発展を歴史の必要条件に据えつつ、「詩・芸術の歴史」が有する「弁証法的発展」が個々の作家・作品のうちに完結するものであること

を主張している。こうした発想の基になっているのは、1908年に発表された論考「純粹直観と芸術の抒情性」(*L'intuizione pura e il carattere lirico dell'arte*、以下「純粹直観」論文と略記)において提示されたクローチェ美学の新たな理論であろう。「純粹直観」論文においては、まず「直観的認識」(＝芸術)と「理論的認識」(＝思考)の区別が強調され、次にその説明として、前者が個別的な認識であるのに対して、後者が普遍的な認識であることが確認される。こうした理論を基にすれば、「理論的認識」についてはある社会における思想の展開・発展といった歴史の流れを示しうるが、「直観的認識」に関しては個々の芸術家・芸術作品の枠組みを超えた歴史は語り得ない。「結びの言葉」の続く箇所において、クローチェは以下のように述べる。

文学史を綴るものはこの種の弁証法的発展に目を向けるべきであり、他方で自らの限界についてははっきりとした自覚を持たなければならない。つまり彼が知るべきは以下のことである。眼前にある芸術作品のそれぞれがもつ弁証法的発展に飽き足らず、ある作品と他の作品の関連性についての弁証法的発展をそこに見出そうとする者がいるとしよう。こうした者は必然的に、作品[固有]の形式を破壊してしまっているのであり、また文学史から離れて、社会史・哲学史に目移りしてしまっているのである。(CR14: 83)

クローチェは未だに「文学史」という表現を用いているが、その指し示す内容は、我々が本稿第2章に定義したところの一般的な意味の文学史とも、クローチェ本人が世紀転換期に論じていた文学史とも大きく異なるものである。他方、作家・作品が個々に完結した世界を形成するものであることを強調しているのにも拘わらずクローチェが「歴史」という単語を捨てていないということは、興味深い事実である。当時のクローチェにおける「芸術」と「歴史」の関係は、件の連載が終了する直前1912年に執筆された『美学入門』(*Breviario di estetica*)に示されている。

真の芸術批評は、無論、美学的批評である。だがそれは、哲学を似非美学として蔑むからではなく、むしろ哲学としてまた芸術の概念として振る舞うからである。真の芸術批評はまた、歴史的批評である。だがそれは、似非歴史学の如く芸術の外部に固執するからではない。歴史上のデータは想像のうちに再現するために利用しつつ(ここまではまだ歴史ではない)、想像上の再現が獲得された後、歴史が作られる *si fa storia* からである。歴史が作られるとは、作者が想像のうちに生み出した事物 *fatto* がいかなるものか見極め、つまり概念によってその事物 *fatto* を性格付けつつ、また何が実際に起きた出来事 *fatto* であるかを確定することによってなされる行為である。(NSE: 84)

ここには、クローチェが1908年頃から研究を行っていたヴィーコの歴史哲学の影響がはっきり見て取れる。ただし、歴史が「作られたもの *fatto*」であるとするヴィーコ的な歴史解釈は、『美学入門』においては、芸術作品と関連づけられることにより

一般的な通時的歴史の枠組みから逸脱する新たな歴史観に作り変えられている¹⁰。「結びの言葉」において、個々の作家・作品に内包される弁証法的発展としての文学史が提起されたが、こうした文学史観は『美学入門』に見られる上掲の理論に基づくものである。

さて、『美学入門』においては、芸術作品やその作り手が時代から独立した存在であることが強調される一方で、芸術作品というカテゴリーに属さない文学表現の存在が指摘されるようになっている。

トルクァート・タッソが『エルサレム¹¹』のために作り上げた美德に満ちたカトリック教会的なアレゴリー、あるいはニッコリーニやグエッラッツィの愛国的な雄弁、さらにはペトラルカが自らの詩句に導入した奇想や細工、こういったものは芸術的とは言えないだろう。しかし、タッソのアレゴリーは、それでもなお、ラテン諸国のカトリック教会による対抗宗教改革の表現の一つである。またニッコリーニやグエッラッツィの雄弁は、外国人や教父に対抗してイタリア人の魂を掻き立てようとする試みもしくはそうした流行に対して示された同意である。さらにペトラルカの奇想や細工は、イタリアの新たな文明の中で生まれ変わり豊かになったトロバドゥールの伝統的優美の信奉を表している。すなわちこれら全ては、歴史的に意味のある尊重されるべき実践的事実なのである。（NSE: 85）

ここに列挙されているのは、「芸術」とは認められない様々な文学表現の具体例である。クローチェはすなわち、文学作品の中には「芸術」（＝「直観的認識」）とそうでない表現（「実践的行為」）の両者が存在しており、前者は一般的な意味での歴史の中に組み込むことはできないが、後者は歴史的な語りの中に入れ込むことが可能（あるいは必要）だ、と述べているのである。

上掲の引用箇所において、クローチェは自ら明示していないものの、「歴史」という表現を二重の意味で使用している。そして、文学史を論じる際、芸術家と呼ぶべき作家あるいは芸術と呼ぶべき作品の歴史と、そうではない作家・作品の歴史とが、互いに全く異なった概念として提示されているのである。

第6章 芸術の普遍性と歴史性

1918年にクローチェが発表した論文「芸術表現の全体性について」（*Il carattere di totalità dell'espressione artistica*、以下「全体性」論文と略記）には、「芸術」の「全体性 *totalità*」（＝普遍的性質）が論じられている。

¹⁰ これは、後の作品『歴史叙述の理論と歴史』（*Teoria e storia della storiografia*, 1915-1918）において、「全ての真の歴史は現代史である」という命題に代表されるクローチェ独自の歴史観へ発展していくものであろう。

¹¹ 単に *Gerusalemme* と表記されているため、『エルサレム解放』と『エルサレム征服』のどちらを指し示しているのかは判断できない。

天才的な芸術家、インスピレーション豊かな詩人、偉大な作品、そして偉大な断章——すなわち、詩の歴史において重要な唯一のものごとの全て——は、病気や一般的な傾向に支配されたりはしない。偉大な詩人や芸術家は、あらゆる国、あらゆる時代から、あの光に満ちた空間に集まってくる。そして、彼らはその国の国民として迎え入れられ、また互いを兄弟として認め合うのである。(NSE: 125)

この箇所には、真の芸術は時代や社会を超越するという考え方が示されている。これは、個々の作品・作家のうちに弁証法的発展が内在するという前章に確認した発想に比べて、一步踏み込んだ議論だと言えよう。

このように定義された《真の芸術》については、当然、作家作品を時代の流れに沿って分析するような一般的な文学史は執筆しえない。そしてその原則は、文芸批評家としてのクローチェの場合にもそのまま当てはまる。この時期（1918-1921）、クローチェは立て続けに、アリオスト、シェイクスピア、コルネイユ、ダンテについて個別研究を発表している。1900年代初頭に行っていた19世紀後半のイタリア文学に関する連載 *Note* において、クローチェは少なくとも方法論的には、文学史的なアプローチを取っていた。それに対して、アリオストやダンテに関するこれらの評論はあらゆる側面から個別研究的な著作だと言える。

だがその一方で、19世紀という特定の時代を対象とした連載も同時に行われていた（1917-1923）。この連載に関してまず注目すべきは、論評の対象がイタリアという国家の枠組みを超えてヨーロッパという広大な地域になったことである。地域ではなく時代を限定するというその手法は、クローチェの文学史が従来の通時的なあり方を乗り越え共時的なそれに変容していたことを示している¹²。この連載に関してさらに注目すべきは、連載が単行本として1923年に上梓された際に、そこに付された題名である。すなわち19世紀ヨーロッパ文学に関するこの著書は、『詩と詩にあらざるもの』（*Poesia e non poesia*）と題されたのである。クローチェがそこで試みたのは、19世紀のヨーロッパを代表する著名な作家について、時代を超越する真の芸術作品（＝「詩 *poesia*」）と、時代の流れに流されてしまった文学表現（＝「詩にあらざるもの *non poesia*」）とに区分することであった¹³。

『詩と詩にあらざるもの』を刊行して以降しばらく、クローチェの学問の中心的課題は、普遍的な価値を有する芸術の「歴史」から、実践的活動の範疇に収められるような文化事象の「歴史」へと移行していく。具体的には、1925年には『ナポリ王国の歴史』（*Storia del Regno di Napoli*）が、1928年には『イタリアの歴史——1871年から1915年まで』（*Storia d'Italia dal 1871 al 1915*）が、そして1929年には『イタリアにおけるバロック時代の歴史、思想——詩と文学——倫理的生活』（*Storia dell'età barocca in Italia. Pensiero – Poesia e letteratura – Vita morale*）がそれぞれ発表されてい

¹² クローチェのヨーロッパ主義は、第1次世界大戦を導いた各国の行き過ぎたナショナリズムへの反動とも捉えうる。

¹³ 『詩と詩にあらざるもの』の詳細については、拙著（國司2016: 183-220）を参照されたい。

る。こうした歴史書、とりわけ『イタリアにおけるバロック時代の歴史』において、クローチェは文学作品を文化的事象として取り上げつつ、その「歴史」を論じている。

1929年には、美学に関する重要な論考「美学要諦」(*Aesthetica in nuce*)が発表されており、そこでは改めて《文学史》に関するクローチェの見解が示されている。芸術・文学の歴史を取り上げた議論の中で、クローチェは、ロマン主義の時代から彼の時代に至るまで、芸術作品を時代の社会的要求への返答として読み取る研究スタイルが主流であったと主張している。そしてその方法論が芸術家や芸術作品の個々の特性や魅力を圧迫してしまうものであることを指摘した上で、次のように述べる。

この方法は、実際のところ、もう一つの方法、すなわち作品の個別的な性格を強調する「個別化的」と形容すべき方法によって、調合 *contemperato* されるものであろう。だが、調合というものには、あらゆる種類の折衷主義に見られる悪癖がみとめられる。こうした悪癖に陥らないためには、次のような方法を取るしかない。それはすなわち、一貫した仕方では個別化的歴史を展開し、また芸術作品を社会史と結び付けて捉えるのではなく、作品それぞれを一つの独立した世界として扱うという方法である。(US: 138)

ここには、それ自体に完結した作家作品をそれぞれ個別に研究することによって「歴史」が形作られるというある種逆転の発想が見られる。『美学入門』において暗に示されていた新たな歴史は形を整え、ここに《芸術固有の歴史》として提示されていると言えよう。

第7章 二つの《文学史》

1933年に刊行された『民衆の詩と芸術の詩』¹⁴は、14世紀から16世紀にかけてのイタリア文学に関する評論を集めた著作であるが、その序文から、クローチェの《文学史》に対する態度を読み取ることができる。

14世紀から16世紀までのイタリアの詩についてのこの評論集を以て、私の「イタリア文学史」の新たな一章をお届けしたい。「イタリア文学史」——しばしば、こうした題名の作品を執筆しないかと方々から丁重な依頼をいただく。一般的にこうした題名の作品に望まれるのは教科書やその類の百科事典的著述であろうが、そうした著作を取りまとめようと望む際には、程度の差こそあれ編纂作業と呼べるような作業が不可避である。だが私は、こうした作業に身を屈めることはできない。(PPPA: IX)

¹⁴ 正式なタイトルは、『民衆の詩と芸術の詩——14世紀から16世紀にかけてのイタリア詩に関する評論集』(*Poesia popolare e poesia d'arte. Saggi sulla poesia italiana dal tre al cinquecento*)。

ここでクローチェは、「文学史」という題を掲げる作品が、一般的に、「編集作業」を介して作られる「教科書」や「百科事典」のような特徴を有していると述べた上で、自らがその種の「文学史」を執筆することを否定している。それでは、クローチェ本人はこの書で何を執筆しようとしているのか。続く箇所それが説明される。

私がここで意図する「イタリア文学史」は——それは私が提供できる唯一の「イタリア文学史」なのだが——、我々の文学に関する、いまだ十分に明らかにされていないと私が考える箇所・作家・作品を分析し議論し明らかにすることである。(PPPA: IX)

クローチェ自らが目指すのは、「教科書」や「百科事典」のような文学史ではなく、あくまで個々の文学作品・文学者に関する未解決の問題に取り組むことを目的とした《文学史》を提示することだというのである。

『民衆の詩と芸術の詩』の序文においては、関連するもう一つの目的が提示されている。それは、「民衆の詩」と「芸術の詩」の間にある「溝を埋め」(PPPA: X)つつ、「詩」の誕生や成長に際して「文化」が果たす役割を示すことである。クローチェによれば、彼のここ数年間の批評活動の目的は、「知的・実践的な構築物ではなく、想像の力に他ならない」ものである「詩」(PPPA: X)を守るための闘争であった。そしてそれ故、詩とは区別された「詩を高める要素となる思想・文化・経験」(PPPA: X)を自らが否定的に捉えていると誤解されてきた。そこでそうした「思想・文化・経験」(PPPA: X)に関して、その価値を改めて論じることを自らに課した、と言うのである。

さらなる誤解を避けてか自ら明言しているわけではないが、ここに言及されている「思想・文化・経験」とは、明らかに『詩と詩にあらざるもの』のうちで「詩にあらざるもの」にカテゴライズされた様々な文学表現のことである。すなわちクローチェは、文化の一部としての文学表現を再び取り上げ、その上で文化史としての《文学史》の執筆を試みている、と言えよう。ここに至って我々は、クローチェが二つの異なる《文学史》を提示していることを確認できる。二つの文学史とはすなわち、普遍的な性質を有する「詩」に関する歴史としての文学史と、時代の流れの中に位置づけられる「文化」の表れとしての文学表現を論じる文学史のことである。

本稿第1章に言及した『詩について』は、1936年に上梓された美学書であった。この作品においては、前章に説明した流れの到達点としてのクローチェの文学史観を見出すことができる。それはすなわち、文学作品には時代を超越する普遍的な性質を備えた「詩」とそれ以外の文学表現とがあり、それぞれについて全く異なる意味での歴史が執筆されるとする理論である。まず「詩」の研究について、クローチェは次のように述べる。

重要なのは、詩の研究が、常に個々の作品の具体性を参照しつつ、本質的にあるいは論理的に個別研究的である、ということのみである。(P: 139)

「詩」の研究が個別的な研究でなければならないとするクローチェの主張は、これまでのクローチェ美学の理論を継続するものである。しかし『詩について』においては、《詩の歴史》についての議論がより進んだものになっていると言えよう。

想起される詩は、人類の歴史を補完する部分なのである。詩人がいなければ、人類の歴史は不完全かつ理解不能なものになってしまう。その一方で詩は、詩の外にある歴史に対して、哲学や政治や倫理に関する歴史に対しては、いかなる資料も提供しない。(P: 139)

詩が個的な存在である限りにおいてその研究は個別的なものでなければならないが、むしろそうした個別的な研究は、翻って人類の歴史の一部になるというのである。クローチェ美学は文学作品や作家が歴史から独立した存在であるという発見に 1910 年代に到達していたが、以降それはさらなる発展を遂げ、普遍的芸術作品 (= 「詩」) が含まれるものこそが総合的歴史だと言明するにいたったのである。クローチェはさらに、「詩」の範疇には含まれない芸術表現についても異なるあり方での歴史の可能性を論じる。

とはいえ、見過ごしてはならないのは、詩の他にも、詩に反するもの、つまり醜いもの、そして詩にあらざるもの、つまり文学作品、が存在している、ということである。両者とも、確かにあの種の「詩の外にある」歴史に資料を提供する。というのも、前者はまさに実践的かつ知性的な関心の介入によって醜さとして形作られるからである。また後者は、これらの関心を自らのうちに解決・解消するのではなく、弁論、気晴らしの文学、愛情の吐露、哲学・歴史・科学の文学的散文といったもののうちに、美しい形式でそれらを飾り立てるからである。(P: 139-140)

「詩に反するもの」「詩にあらざるもの」は、それぞれ「醜いもの」および「文学」と言い換えられた。その上でクローチェは、これらもまた「歴史」のうちに組み込まれるべきだと論じている。『詩について』において、これまでになく明瞭な形で二つの《文学史》が提示されていると言えるだろう。

第8章 デ・サンクティス的な文学史の否定

『詩について』において明示された二つの《文学史》は、その後、クローチェの文芸批評において実践に移される。1941 年に出版された『古代および近代の詩』(*Poesia antica e moderna*) においては、ホメロスやウェルギリウスからロベ・デ・ベガやユゴーに至るまで、時代や国籍を超えた普遍的価値をもつ「詩」および「詩人」が組上に載った。一方、時代や社会の表れとしての「文学」に関しては、1949 年の『18 世紀イタリア文学——批評覚書』(*Letteratura italiana del settecento. Note critiche*) のうちに著された。興味深いのは、この作品を以て、クローチェのイタリア文学に関する研

究がダンテ以降の全ての時代をカバーするものになったことである。

文芸批評家としてのキャリアを振り返ると、クローチェは、《文化の歴史》としてはイタリアに地域を限定した通時的な歴史をつづり、《詩の歴史》としては時代も国籍も考慮に入れない普遍的な歴史¹⁵を描いた、ということになる。クローチェが長年の研究を経て築き上げた独自の文学理論は、クローチェ自身の手によって完全な形で実現したのである。そして、自らの文学理論が批評作品のうちに完成を見たとき、クローチェのうちには、自らの文学史を提示することによってデ・サンクティスを乗り越えたという意識が芽生えていたのかもしれない。

1950年、クローチェは、文芸批評と理論的考察の両者を含む最後の大著『詩人の読解、および詩の理論と批評とに関する省察』（*Lettura di poeti, e riflessioni sulla teoria e la critica della poesia*、以下『詩人の読解』と略記）を刊行した。そこに、「時代ごとの文学史および論文や個別研究による歴史」（*Storia letteraria per epoche e storia per saggi e monografie*）という題のもと、《文学史》を論じる一章（LP: 237-246）がある。

まず、次のことを改めて述べておく。すなわち、馬鹿げた噂話では私が「詩・文学の歴史を否定した」などとされているようだが、そのようなこと決してないと。そうではなく、私はむしろ、こうした歴史に関する誤った形式を否定しつつ、その正しい形式を強調したのである（LP: 237）

最晩年の著作において、クローチェ自らが《文学史》を否定したわけではないと断言していることは、特段の注目に値する。すなわち、クローチェが文学史を否定したとする見解は、あくまで本稿第一章にて提示したような一般的な意味における文学史についてであり、クローチェ自らは独自の《文学史》を提唱し、それを以て文学史をむしろ肯定していたのである。

では、クローチェ当人が提唱した《文学史》とは如何なる文学史か。『詩人の読解』の続く箇所でその内容が述べられる。

芸術家は、自らの情感を美の形式に変換するのみである。そして、個性的で生に満ちた模倣できないこれらの形式は、歴史的現実のうちに位置づけられる彼の作品なのである。美しいものとしてそれらの形式を見分けること、またそれら独自の性質のうちにそうした形式を見定めることは、その歴史を提供するということに他ならない。（LP: 241）

ここに提示されている《文学史》のあり方は、『詩について』において示された概念を拡張したものと言えよう。すなわちクローチェは、芸術作品は極めて個的な存在

¹⁵ 結局、欧米以外の作家が取り上げられることはなかったが、そうした限定は理論的な意図に裏付けられたものというより、実践上の制約（例えば、クローチェはヨーロッパ言語以外には通じていなかった）によってもたらされたものと考えべきだろう。

である限りにおいて一般的な（通時的）歴史のうちに組み込むことはできないものだが、その一方でそうした特性を有する芸術作品もまた歴史の一部であり、これを内部に包摂するものが真の歴史である、と述べているのである。ただし、『詩人の読解』におけるクローチェの立場はより明確なものになっていると言える。例えば、次に引用する箇所ではデ・サンクティスに言及している。

しかし、彼は「デ・サンクティスは」問題そのものを認識できていなかった。というのも詩・文学の歴史については、根源的な新たな観念が必要とされていたのである。[…] 時に彼は、「文化史 storia civile」の解説のような形式に陥る兆候を見せる。そしてその「文化史」は、「詩・文学の歴史」の中に不当に組み込まれ、そこで際立った存在になってしまうのである。（LP: 239）

クローチェは、デ・サンクティスが《詩の歴史》と《文化の歴史》とを混同していることを批判している¹⁶。クローチェは最晩年に至って、自らの師と仰いだデ・サンクティスを公然と批判するようになったのである。こうしたデ・サンクティス批判を経て、クローチェの文学史観はかつてないほどに明確になる。『詩人の読解』の続く箇所では以下のように述べられている。

しかし、一方で詩・芸術に関する唯一の完全な歴史を、評論や個別研究による歴史として要求しつつも、他方で私は、それとは異なる形に形成された著書を執筆するように導く欲求を正当で理にかなったものとみなすように努めている。そうした著書はすなわち、文化の時代区分ごとにそのテーマを示しつつ、そうした時代区分の輪郭に作家の外在的かつ実践的な伝記的情報や、哲学や学問に属しているか、あるいはその他の目的のために、有益であったり適切であったりする情報を付け加えるものである。（LP: 241）

明確な区別を前提とした上で、クローチェは、《詩の歴史》および《文化史》（「文学」はこちらに属する）両者の妥当性を確認している。この文言にはクローチェの文学史観の最終的な形が表れていると言えるだろう。

おわりに

本稿ではクローチェの文学研究者としてのキャリアを辿りつつ、彼の文学史観の変容に関して次のことを明らかにした。まず、Wellek が指摘したようなクローチェの文学史観は晩年に完成するものであり、初期クローチェにあっては実はデ・サンクティス的な文学史は肯定的に捉えられていた。そして 1910 年代、クローチェの美学

¹⁶ ただし、まず批判的になっているのはティラボスキやジューディチの『イタリア文学史』であり、デ・サンクティスは先達を乗り越えた最初の近代批評家として評価されている。

理論および歴史理論が発展を遂げ、一般的な意味での《文学史》が否定されるようになると同時に、真の《文学史》のあり方が問題となっていた。さらに1930年代以降、詩固有の歴史（個別的かつ普遍的な作品・作家の歴史）と文学史（時代に左右される文化の一部としての文学表現の歴史）との区別が確立されていく過程を経て、両者が共に肯定されるに至った。そこから見出されるのは、一般的な社会史から文学を分析するという従来のあり方を反転させた、芸術作品を通じて描き出す新たな《歴史》であった。そして晩年、一方では西洋の古今の作家を扱う著書を以て《詩の歴史》を、他方ではイタリア文学全体の歴史を論じる作品により《文化史》を、それぞれクロッチェ自らが具現化する。そしてこれを機に、クロッチェは自らが具現化した二つの《文学史》を根拠に据え、ついにデ・サンクティスの文学史観を批判するにいたる、のである。

さて、このようにクロッチェが新たな《文学史》を提唱したことは、文学研究の世界においてどのような影響を及ぼしたのだろうか。Wellek や Getto がクロッチェの文学史観を正確に捉えられていなかったことを見ると、彼の《文学史》が次の世代にそのまま継承されたとは考えにくい。しかし、社会・思想の歴史の一部として文学史を捉えた19世紀的な文学史観を乗り越え、それに代わる文学作品固有の歴史をクロッチェが提示したことは、20世紀的な文学研究の到来の呼び水のような役割を果たしたと言えるかもしれない。現に、例えば、クロッチェに師事したドイツの文学研究者のアウエルバッハ、あるいはクロッチェと論戦を交えたクルツィウスが、それぞれ『ミメーシス』および『ヨーロッパ文学とラテン中世』を刊行することによって、独自のヨーロッパ文学史を提示することができたのは、その前にクロッチェの文学研究という経験があったからのことではないだろうか。だが、より踏み込んだ研究が求められるこの問題に関しては、稿を改めて論ずることとしたい。

文献一覧

【テキスト】

- CR** «La Critica. Rivista di letteratura, storia e filosofia», Bari, Laterza, 1903-1944.
 **には年号が入る。(CR08は、1908年刊の『クリティカ』誌第6巻を指す)
- ESE *Estetica come scienza dell'espressione e linguistica generale [Sandron 1904]*, a cura di F. Audisio, Napoli, Bibliopolis, 2014.
- LI *La letteratura italiana. Per saggi storicamente disposti*, a cura di Mario Sansoni, Bari, Laterza, 1965.
- LP *Lettura di poeti, e riflessioni sulla teoria e la critica della poesia*, Bari, Laterza, 1950.
- NSE *Nuovi saggi di estetica*, Napoli, Bibliopolis, 1991.
- P *La poesia: introduzione alla critica e storia della poesia e della letteratura*, 6^a ed. Bari, Laterza, 1963.
- PE *Problemi di estetica*, Bari, Laterza, 1966.
- PPPA *Poesia popolare e poesia d'arte*, Bari, Laterza, 1967.

【参考文献】

- Compagnon A.
1983 *La Troisième République des lettres*, Paris, Éditions du Seuil.
- Getto G.
2010 *Storia delle storie letterarie*, a cura di Clara Allasia, Napoli, Liguori [1942].
- Jauss H. R.
1970 *Literaturgeschichte als Provokation der Literatur wissenschaft*, Frankfurt am Main, Suhrkamp.
- Muscetta C.
1990 *Francesco De Sanctis*, Bari, Laterza.
- (a cura di) Sansone M.
1963a *La letteratura italiana per saggi storicamente disposti*, vol. III, Bari, Laterza, [1956].
1963b *La letteratura italiana per saggi storicamente disposti*, vol. IV, Bari, Laterza, [1960].
1965a *La letteratura italiana per saggi storicamente disposti*, vol. I, Bari, Laterza, [1956].
1965b *La letteratura italiana per saggi storicamente disposti*, vol. II, Bari, Laterza, [1956].
- Wellek R.
1981 *Four Critics. Croce, Valéry, Lukács, and Ingarden*, Seattle and London, University of Washington Press.
- 2006 *Introduzione a F. De Sanctis, Storia della letteratura italiana*, Milano, BUR, [1983].
- Wellek R., Warren A.
1956 *Theory of Literature*, New York, Hardcourt, Brace & World, INC [third edition].
- 國司航佑
2016 『詩の哲学——ベネデット・クローチェとイタリア頽廢主義』, 京都大学学術出版会.